

## 健康観・死生観と宗教的な心

東洋英和女学院大学 林 文



この様な題をつけておきながら、いずれの言葉もあいまいのままである。特に、宗教という言葉は、宗教学の専門家でもなく、かといってある宗教の信者でもない私にとっては、宗教とは何かが分かっているはずもない。しかし、科学の発達した現代社会の中でも、何かしら宗教的なものが、人間の基底的意識として、生き方や社会意識と関連しているように思える。ましてや、健康や命に関する考え方や宗教的な感覚とは何らかの関連があるのではないかと考えられる。私の周辺の研究者は、このようなところについて、むしろそれぞれの言葉を定義することはさておいて、実際の人々の考え方や意識を調査することによって探求すべく、国内外でいくつかの社会調査を行ってきた。その結果をここに示してみたいと思う。

社会調査で宗教について尋ねる質問は、「あなたは何か宗教を信じていますか」「あなたは何か信仰を持っていますか」などと尋ねる。日本における成人対象の多くの調査で、「信仰を持っている」という回答は30%程度である。主な欧米諸国では、1990年前後調査でアメリカは85%、イタリア88%、フランス64%、ドイツ（旧西）75%、イギリス64%であり、これらに比べて日本は宗教を信じている人が少ない。このことは、以前から知られており、日本人は宗教ざらいであると考えられた。また、欧米の人々と接すると「どの宗教を信じているか」と質問

され、困ったという話もある。彼らは、宗教を信じていない人はそれなりの信念のもとに無宗教者であると考えるので、「信仰を持っていない」と答えると、驚かれたという話もある。日本人は信仰を持っていないというのに、無宗教者というイメージとは違うらしい。統計数理研究所の故林知己夫教授らは、1953年から5年毎に行われてきた「日本人の国民性」の1958年調査から、宗教についてa「信仰を持っているか」の質問だけでなく、「信仰を持っていない」人に対してb「それでは、いままでの宗教にはかかわりなく、『宗教的な心』というものを、大切だと思いますか」という質問を用意した。すると、「信仰を持っている」人は35%、「持っていない」65%のうち70%が「宗教的な心は大切」と回答した。合わせると80%が宗教に関心を持っていることになり、日本人が無宗教ではないことを示した。日本のこの50年間の変化をみたのが表1である。質問形式が途中で変更されているが、継続して行われてきたことによって、日本人はこの50年間に、年齢が高くなるにつれて信仰を持つようになることも実証された。全体的には宗教への関心は減少傾向で、近年、高年齢の信仰の率は確かに低下している。それでも2003年には70%が宗教を信じていたり、宗教的な心を大切と想ったりしている。ただし、全体としてこの50年間であまり変化していないのは、高齢化社会のためでもある。

表1 「信仰あり」と「宗教的な心は大切」の時代変化 (%)

調査年	1958	1963	1968	1973	1978	1983	1988	1993	1998	2003
「信仰あり」	35	31	30	25	34	32	31	33	29	30
「信仰なし」の中の宗教的な心大切	70	77	76	69	74	(73)	(63)	(61)	(58)	(60)
「信仰あり」の中の宗教的な心大切	—	—	—	—	—	(94)	(93)	(94)	(93)	(94)
全体の中の宗教的な心大切	—	—	—	—	—	80	72	72	68	70
「信仰あり」または宗教的な心大切	80	84	83	87	83	81	74	74	70	72

注1)「日本人の国民性調査」(統計数理研究所)による。

注2)3行目と4行目の1983年以降の( )内はクロス集計による。

細かい話になるが、質問形式の変更は、1980年代からbの質問を、aで「信仰を持っている」と回答した人に対しても尋ねるようにしたことである。日本では「信仰を持っている」ならば「宗教的な心は大切」とするのが当然だろうと、敢えて尋ねていなかったが、同様の質問を欧米で行うべく、1970年の日系米人調査を始めとして国際比較調査研究に進み、当然とは言えなくなった。こうした調査から、日本でも、信仰を持っていても宗教的な心は大切でないという人は皆無ではないが数パーセントでしかないことも実証され、信仰を持っているなら宗教的な心は大切という人がほとんどであるのが日本の特徴であることもわかってきた。

日本人の宗教は一神教とは別の形であることは容易に想像でき、それを「宗教的な心」という言葉で引き出したといえる。素朴な宗教的感情という言い方もできると考えている。国際比較調査で共通質問票の準備段階で、宗教について尋ねる質問項目が、西欧では性別や年齢別のような個人属性の一つであるのに対して、日本では、さまざまな意見を問う質問群に入れられる習慣があることも、社会的な受け止め方の違いとして認識された。欧米では信仰は性別などと同様のその人を規定する重要な項目であるのに対して、日本では信仰は個人的な意識の問題なのである。こうした違いは、ホスピスと宗教との関係において、欧米とは異なる考え方が必要になってくるといえる。一方、欧米においても、宗教を信じる人は減少しており、宗教に対

する新たな見方として日本の宗教観への関心が生じている。

前述のように、信仰を持っている、あるいは、宗教的な心を大切と思う、という人は多少減少傾向にある。しかし、ここ数年、霊魂・死後の世界・スピリチュアリティといった言葉が若い人たちの間で流行といってもよい程の関心を集めた。それらを宗教的な心という範疇に入れることも可能であり、基底意識としては、減少していないと言えよう。

さて、その既存の宗教にかかわらず日本人が感じ取っている「宗教的な心」とは何なのか。日本人の基底意識構造を探る先駆的調査が、1976年、前述の林知己夫先生が中心となって首都圏で実施された。日常生活における行事・習慣、健康観、死生観などについての調査内容で、「お化け調査」とニックネームがつけられている。最近の横浜市で、それに準ずる小調査を実施したので、その調査結果と合わせて考えてみる。

素朴な宗教的感情に関する質問として、表2のようなものが取り上げられている。自然観に近いものを含む。日本人の宗教研究において、自然観的宗教観、あるいは宗教観的自然観といわれるところである。2006年の横浜調査は郵送調査であり、関心の高い人が回答している傾向があるが、それを差し引いても、このような感情になった人はかなりあると見ることができる。表の右3列には、横浜調査で、信仰あり群、信仰なし群、宗教的な心を大切でないという群における選択率を示してあるが、宗教から最

表2 素朴な宗教的感情 「なったことがある」の選択率

	1978年 東京	2006年 横浜	信仰あり	信仰なし	宗教的な心 大切でない
a. 神社の前で、心が落ち着いたり、あらたまった気持ち	63	79	85	75	64
b. お寺の仏像の前で心が落ち着いたり、あらたまった気持ち	69	82	88	79	64
c. キリスト教の教会の中で、心が落ち着いたり、あらたまった気持ち	*22	49	60	44	34
d. 「神様」「仏様」と心の中で叫んだりお祈りしたくなる	56	81	94	74	72
e. 大きな古い木に、神々しい気持ちをいだく	*57	70	85	63	53
f. 日の出や日没、また満月の光にあらたまった気持ち	—	69	83	61	43
g. 山や川や草や木など全てに霊が宿っている気持ち	24	48	62	39	32
h. 針供養など、使い古した道具に感謝の供養をしたい気持ち	37	51	60	46	34
i. 誰も見ていなくても、よくない行いはバチが当たるような気がする	—	87	94	83	77

注)\*印は東京1976年調査

も離れている第3の群でさえも、a、b、d、iは3人に2人がこうした感覚を持っていること、逆に、宗教的な心が大切という人は、これらの感情をより多く持っていることも示され、こうしたものが、宗教的な心を表すと考えてもよさそうである。

死生観の質問は「A. ある人が、どこに生まれいつ死ぬかは、その人の運命によって決まっており、人の力では変えられない」、「B. 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ」、「C. この世でのよい行いは来世で報われ、悪い行いは来世で罰せられる」、「D. 人は死ぬと、神様や仏様のもとに行く」、「E. 人が死んでも、その靈魂は、家族と縁がきれることはない」などについて、同意するかどうか尋ねている。Aの運命論は30年前に比べて減少しており、その他は変化が少ない。いずれも高年齢ほど同意が多いと予想したが、Bの輪廻の考えは若い年齢層ほど同意の率が高く、「死後の世界」や「靈魂」の存在を否定できない考えと同様に、今の若い年齢層が、宗教という言葉とは別に、宗教に近い「何か」を求めていることが示唆される。そうした「何か」も、おおきくは宗教的な心、素朴な宗教的感情として捉えてよいのではないかと考えている。

こうした宗教的な心が、健康観と関連があるのだろうか。健康観として取り上げた質問項目から、健康信頼と医療信頼の因子に分けて、信仰や生命観・死生観との関連をみた。健康信頼は「少々の病気で医者に行くのはいくじない」「健康を気にして、したいこともしないで、がまんするなんて、ばかばかしい」「風邪をひいたぐらいで仕事や学校を休むのは、だらしがない」「健康のことを気にしてばかりいたら、病気になってしまう」「具合がよくなったと思ったら、すぐ薬をのむのをやめる」の回答から、医療信頼は「医者からもらった薬は、指示どおりに、必ずのむべきだ」「薬は、医者に処方してもらわないと不安で飲みたくない」の回答から、それぞれ尺度として捉え、高い群、低い群に分けた。宗教・死生観に関連する質問の回答が、高群と低群で違いがあるか、高群の傾向として表示したのが表3である。

表に記したのは、ある程度の差がみられたもののみである。「健康満足感」、「宗教的な心は大切か」「生死の運命は決まっていて変えられない」などは違いがみられなかった。

年齢が若い方で、宗教的な心を大切とするものが

表3 健康観と宗教や死生観との関連

	健康信頼高群	医療信頼高群
年齢		
20-39歳	・	—
40-59歳	—	—
60歳以上	+	+
信仰・信心		
信仰あり	・	+
信仰なし	・	—
人生は		
太く短く	+	—
細く長く	—	+
生まれ変わり		
そう思う	・	—
どちらとも	・	・
そう思わない	・	・

	健康信頼高群	医療信頼高群
来世で報われる		
そう思う	+	+
どちらとも	・	・
そう思わない	—	・
死ぬと神仏のもとへ		
そう思う	・	+
どちらとも	・	・
そう思わない	・	—
靈魂は家族と		
そう思う	・	+
どちらとも	・	・
そう思わない	・	—

減ってきているが、靈魂の存在や死後の世界などを「あるかも知れない」という意識がある。宗教という言葉や概念とは別のそれに代わるものは求められており、占いやスピリチュアルカウンセリングなどの流行につながっていると思われる。一見宗教離れが進んでいる新しい時代にも、そうした宗教や素朴な宗教的感情は基底意識として存在し、日常のさまざまな意識と関連しているのではないだろうか。日本においては特に、年齢との関係も高いため、年齢の効果を除去した関連を調査によって検証することは難しいが、加齢との関係そのものも含めて、宗教、宗教的なことの今日的あり方を考える必要を思う。

参考文献

- 1) 林知己夫編：「ノンパラメトリック多次元尺度解析についての統計的接近」, 統計数理研究所研究レポート92, 2004.
- 2) 統計数理研究所国民性調査委員会：「国民性の研究 第11次全国調査—2003年全国調査—」, 統計数理研究所研究レポート92, 2004.
- 3) 統計数理研究所国民性国際調査委員会：「国民性七か国比較」, 出光書店, 1998.
- 4) 林 文：「日本人の自然観と素朴な感情」, 学際, No.12, 2004, 32-38.
- 5) 林 文：「宗教と素朴な宗教的感情」, 行動計量学, 33 (1), 2006, 13-24. (吉野 諒三編：「東アジア国民性比較 データの科学」, 勉誠出版, 2007. に再録)
- 6) 林 文：「社会調査からみる宗教・素朴な宗教的感情と死生観」, 死生学年報2007, 129-154, LITHON.
- 7) 林 文編：「身近な生活における伝統文化意識に関する調査—2006年横浜市4区郵送調査報告書—」(東洋英和女学院大学死生学研究所助成研究「日本人の素朴な宗教的感情についての統計的研究」報告書), 2007.